

この小冊子は、主に十代の若者向けに作られました。
記載されている文は、2005年3月、下諏訪キリスト教会で行われた
ユースキャンプで語られたメッセージを、編集・加筆したものです。

なお、聖書は新共同訳を使用しています。

目次:

第1章「恋愛をやめよう！」 文:清野基

第2章「インタビュー:真実の関係に生きる」 ゲスト:桐山壘

第3章「神の道を選ぶ」 証し:清野使門

付記「兄弟姉妹の関係 ～下諏訪キリスト教会と僕の歩み～」

編集・証し:清野耕地

人物紹介

第1章「恋愛をやめよう！」 清野基

え？ マジで？

本気なの！？

あんな楽しいものをやめろだって！

一体何が言いたいんだ！

と、思った君にこの文章をささげます。

君の気持を裁きたいのではありません。神が君に願っておられることを知ってほしいのです。

みんな恋愛が大好きだ。多くの漫画や物語や映画やドラマは、実に恋愛の相手と「結ばれる」ことによって完結している。それほど恋愛は人の心をわくわくさせるものだ。僕が高校生だった時、マラソン大会というものがあった。女子が先にスタートし、女子がゴールインしてから、男子がスタートする。折り返し地点を過ぎ、走り終わった女の子たちが応援するために沿道にずらりと並んでいる地点に来ると、男子たちのスピードが上がる上がる！ 冗談じゃなく倍ぐらいになるものだ。男の子たちは女の子たちに興味があり、女の子たちは、男の子たちに興味がある。年頃の高校生たちが集まると、ほとんどの会話は異性の話。女の子の雑誌を見ると、どのようにして男の子たちの視線を引き付けるかということにとてつもない情熱をかけるように煽っている。メイクにしろ、服のコーディネートにしろ、全ての基準は、「男の子のハートをつかむため！」男のためにも、こんなダイエットの広告があった。「夏までに腹をへこます」何のために？ もちろん、がっちりとした体形を持つことによって、夏の海で女の子を捕まえるために。

僕は、高校生の時、バンドに夢中だった。何が一番うれしいかって？ そりゃもちろん、女の子たちの声援ですよ！ 男にほめられるよりも数倍うれしい。

みんなに考えてみてほしい。僕の心は、何に喜んでいたんだろう？ 僕の心は一体何を求めていたんだろう？ 神は、その心を喜んでおられたらだろうか？

いったい恋愛の何が問題なのか？

多くの若者たちは恋愛を楽しんでいる。クリスチャンたちも例外ではない。特に深くは考えずに、告白し、付き合い、うまくいかなくなったら別れる……。を繰り返す。若者たちが求めているものは何だろう？ 恋愛を繰り返すことで、心の何を満たそうとしているのだろうか？ 「好きです。付き合ってください」。その一言の裏には、どんな心が隠されているのだろうか？ 付き合ってくれなかったら、どんな気持ちになるんだろう？ OKしてくれたら、どんな気持ちになるんだろう？

僕ははっきり言いたいのだが、「好きです。付き合ってください」の言葉には、かっこして「わたしはあなたの人生が欲しいのです。あなたを自分の思い通りにしたいのです。あなたによって自分の欲望を満たしたいのです」という心が含まれていると思う。そこには、「好きだから」→「付き合いたい」という自分の願いしか存在していない。聖書は、そのような関係を持つようには教えていない。

コリント I 10 : 2

誰でも自分の利益ではなく、他人の利益を追い求めなさい。

自己中心は、神の願っておられる生き方ではない。神が願っておられるのは、神を愛し、神に仕え、周りの人々を愛し、その人たちが神を愛する生き方ができるようにその人たちに仕えるという生き方だ。ただ自分が楽しみたい、自分が気持ちよくなりたい、そのような生き方をしなさいと神は言っておられない。

恋愛の最大の問題は、そもそもの動機がただ自分が喜びたいという自己中心的な生き方からきていることにあるのだ。ジョシュア・ハリスは大胆にこう書いている。

かつての僕にとって、人間関係の出発点は、自分の欲望であって、神の望み、神が欲することではなかった。僕は自分の必要だけを考え、自分の計画に人々を埋め込もうとした。それで僕の望みが達成されたかと言えば、答えはノーだ。僕は他人のみならず自分も傷つけ、そして最悪なことに神に罪を犯した。

でも、自分の態度を変え、神を喜ばせることと、人々を祝福することを最優先にした時、僕は本当の平安と喜びを見つけた。女の子たちをガールフレンド候補としてみるのをやめ、キリストにある姉妹として接し始めた時、僕は真の友情がもたらす豊かさを発見した。……僕は恋愛ときっぱり決別した。それは神が準備してくださったより素晴らしいものを発見したからなんだ。

ジョシュア・ハリス「聖書が教える恋愛講座」より

ジョシュアが言いたいことがわかるかい？ 彼は恋愛におぼれていた男だったが、あるとき恋愛をやめる決心をした。彼はモテなかったために開き直ったのではない。彼は、恋愛を繰り返すならば神の前に清く生きることができない事に気づいたのだ。それは神を愛し、隣人を愛するという神に救われたクリスチャンの歩みではない。むしろ、自分の欲望を満たし

たいという自己中心的な生き方だ。彼は、真に神を愛し、隣人を愛することとはどういうことかを考えていった結果、恋愛をやめるという決心をしたのだ。そうすると、女の子に対しての視線が変わってきた。それまでは、女の子は自分の欲望の対象でしかなかった。しかし、彼が自分の生き方を変える決心をした時、彼は女の子たちをキリストにある大切な姉妹として見るようになったのだ。自分の利益ではなく、他人の利益を求めるようになったのだ。

僕らの人生の目的は何だろう？

つまり、大事なのは神を愛し、神に仕えたいという心と、他人をほんとうの意味で愛し、成長していけるように助けたいと思っている心があるかどうかだ。だからこれは、恋愛どころかと言うよりも、君の生き方の問題だ。君が、神を愛し、神に仕え、神が与えてくださった周りの人たちを真に愛していこうとしているのか。君の人生の目的は何だろう。神を愛し、人に仕えるという目的だろうか。それとも、自分が楽しいことをしたいという自己中心的な目的だろうか。

男女の関係においてもこれは全く同じだ。神を愛し、人に仕えるというこの目的は、男女関係においても実践される必要がある。ちょっと考えてみてほしい。次のような状況において、君の心はどのような状態になっているだろう？

男の子編

- ・女の子がいて、つい動きがオーバーになったり、言葉が大げさになったりしていないかな？ それは、どのような心でそうしているんだろう。それが周りの人を建て上げることになるからそうしているのだろうか。それとも女の子の注目を自分に集めたいだけじゃないだろうか。

- ・女の子と電話番号やメールアドレスを交換するとき、そこにはどんな心があるだろう。それがその子を建て上げることになるのだろうか。それとも、女の子の「何か」を知ること、自分の欲望を満たしたいだけなのか。
- ・女の子と電話やメールやチャットをするとき、君の心はどんな状態だろう。君の心は何を楽しんでいるのだろうか。その相手がそのことによって神を愛し、神に仕えることができるようにと思ってしているのだろうか。それとも、女の子と関わることのわくわく感を自分が楽しみたいだけなのか。
- ・礼拝の時、つい女の子の近くに座りたいと思ってしまうことはないかな？ それは、どのような心でそうしているのだろうか。それがその子を建て上げ、キリストに近づけることになるからそうしているのだろうか。それとも、女の子の隣に座ることで、何か自分がわくわくするような気持ちになりたいからそうしているのだろうか？
- ・礼拝の時、女の子がそばにいと、つい「霊的クリスチャンパフォーマンス」をしているということはないだろうか。その目的は何だろう。その子をキリストに結び付けたいからしているのか。それとも、自分がいいクリスチャンだということをその子にアピールしたいからなのか。
- ・君の好きな音楽のCDを女の子に貸すとする。そこにはどんな思いがあるだろう。それがその子を成長させることになるのだろうか。それとも、自分の親切さをその子に売り込みたいだけなのか。

女の子編

- ・男の子がいっしょにいる場所に出かけていくとき、関心を引くためにかわいらしく見せるためのファッション、髪型、お化粧をしていくということはないかな？ それは、どのような心でしているのだろうか。それが男の子たちを建て上げることになるのだろうか。それとも、自分のかわいさを男の子たちにアピールしたいだけなのか。
- ・男の子がいると、つい「女の子らしく」みせるような言葉遣いや、行動をしていないだろうか。男の子の関心を引くために、あえてかわいらしくふるまってみたり、弱々しくふるまってみたりしていないだろうか。それは、男の子たちが神を愛し、神に仕えるように成長してほしいとそうしているのか。それとも、自分の中に潜む欲望を満足させたいだけなのか。
- ・男の子から借りたCDを返すとして、その時、ちょっとしたメモを添えるとする。その文面は心から相手に感謝するためのものだろうか。それとも、感謝をあらわす文面でありながらも、何か自分に特別感を抱かせるようなニュアンスを込めていないだろうか。
- ・それとなく男の子たちの集まりに近づこうとしてはいないだろうか。それは何のためだろう。男の子たちをキリストに向かわせたいのだろうか。それとも、自分の心に異性に対する飢え渴きのようなものがあり、それを満たしたいだけなのか。
- ・女の子たちで、「あの人はかっこいい」「あの人はまいち」なんて男の子の品定めをしていることはないだろうか。その目的は何だろう。そうすることで、男の子たちが神の栄光のために仕えるようになることを願っているのだろうか。それとも、憧れをふくらますことでわくわくした

いだけなのか。

そして、こう考えてみてほしい。

これらの状況にいるとき、
イエスさまが現れて、
十字架の釘の跡が残る手を君の肩においたとき、
君はイエスさまに対して
恥ずかしくない思いでいられるだろうか？

コリントⅡ 5 : 9

ひたすら主に喜ばれるものでありたい。

ローマ 6 : 12

あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません。

恋愛をやめよう！ それは言いかえれば、自己中心的な人生をやめ、ほんとうにイエスさまに喜ばれる人生を生きよう！ ということだ。さあ、考えてみてほしい。君の人生の目的は何だろう？

恋愛と結婚はどう違うのか？

さて、人を好きになる感情自体は罪ではない。それは、神が人に与えてくださった良いたまものだ。でも、良いたまものも、人は悪く使うこともできる。

コリント I 10 : 23

「すべてのことが許されている」しかし、全てのことが益になるわけではない。「すべてのことが許されている」しかし、すべてのことがわたしたちを造り上げるわけではない。

人を好きになる感情は、結婚した夫婦がよりよい関係を築くために与えられたものであり、独身の男女が「付き合う」ために与えられたものではない。なぜなら、聖書において許されている男女の関係は「結婚」だけだからだ。

テサロニケ I 4 : 3～5

実に神の御心は、あなたがたが聖なる者となることです。すなわち、みだらな行いを避け、おのおの汚れのない心と尊敬の念を持って妻と生活することを学ばねばならず、神を知らない異邦人のように情欲におぼれてはならないのです。

この個所では、結婚生活とみだらな行いが対比して書かれている。もちろん、これは特に不倫についての言葉と考えることもできるが、基本的には結婚以外の男女の関係は、聖なる者の生き方ではないと語っている。これは、特に注目すべき御言葉だと僕は思う。

結婚とは、契約だ。ある意味、それは一組の男女が強制的な状況に追い込まれることだ。聖書は安易な離婚を許してはいない。契約による強制的な環境の中で、夫婦は自分を捨て、お互いを愛することを学んでいく。それはまさに献身を意味する。

では、恋愛とは何だろう？ そこには何の契約も責任もない。自分が好きだから告白し、好きだから付き合い、楽しみ、うまくいかなくなったらサッサと別れる。そう、恋愛とは、まさに自己中心なのだ。契約のない関

係には、真の愛は絶対に生まれない。愛とは、責任が伴って初めて生まれるものなのだ。

恋愛を定義すると、こんな感じになるだろう。

○恋愛とは……

- ・わたしはあなたが好きです。
- ・でも、わたしはあなたにすべてをささげません。
- ・今のあなたからもらえるものをもらいたいです。
- ・あなたへの恋愛感情が消えたら、わたしはもうあなたを愛しません。

○結婚とは……

- ・わたしはあなたと契約を結びます。
- ・わたしの命も、わたしの持ち物も、わたしの未来も、全部あなたのもです。
- ・これからわたしは、あなたと共に生きていきます。
- ・あなたが愛してくれなくても、わたしはあなたを愛します。
- ・わたしの中から「あなたを好き」という感情が消えても、わたしはあなたを愛します。

結婚において、自己中心は許されない。夫婦の関係は、まさに神の愛を表すものだ。自分の利益を求めない、相手に自分をささげる愛。つまり、男女の間では結婚なくして真の愛は実現しないのだ。

恋愛でもなく、結婚でもなく、神を愛する人生

パウロは、コリント7章で大胆に独身を進めている。もちろん、彼はそれは神からの命令ではなく、自分の意見だと言っているが、彼の一番言いたいことは、これだと思う。

コリント I 7 : 3 2 ~ 3 5

独身の男は、どうすれば主に喜ばれるかと、主のことに心を遣いますが、結婚している男は、どうすれば妻に喜ばれるかと、世のことに心を遣い、心が二つに分かれてしまいます。独身の女や未婚の女は、体も霊も聖なる者になろうとして、主のことに心を遣いますが、結婚している女は、どうすれば夫に喜ばれるかと、世のことに心を遣います。このようにわたしが言うのは、あなたがたのためを思っただけで、決してあなたがたを束縛するためでなく、品位のある生活をさせて、ひたすら主に仕えさせるためなのです。

君が将来結婚するのかわからないのか、それはわからない。神だけがご存じだ。でも、結婚しようとしまいと、君が今すべきことは心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして神を愛することだ。恋愛に自分の時間とエネルギーをかけることではない。ひたすら神を愛し、神に仕え、他人に仕えることが君の人生の目的なんだ。

さあ、神を愛そう。この目的に君の人生をかけよう！

第2章 インタビュー「真実の關係に生きる」

ゲスト：桐山 壘

はじめに

——壘さんの若い頃の恋愛観というのはどういうものでしたか？

僕の恋愛は、まさしくこの世の価値観そのものだった。好きだから告白する、相手も好きだったら、じゃあ付き合ってみる。合わなかったら別れる。それにどっぷり浸っていた。それしかないと思っていたし、それ以外の方法でどうやって結婚するの？ っていう感覚だったよね。まあ、そういう中でも、「でも肉体関係はだめだよね」とか、それぐらいは分かった。逆に言えば、それぐらいしか分からなかった。

僕は21才の時に彼女（妻）と付き合い始めて、23才で結婚したんだけど、やっぱり神様に喜ばれる付き合い方がどういうものなのかは具体的に何も分からなかったね。「清くありたいよね」という願いだけは明確に存在していたけれど。

当時僕は、まだまだぼけっとしていたけれど、彼女の方がそれなりに線を引いてくれるところがあって、その点はよかったな。例えば、「あなたのアパートには絶対に行かないから」とかね。もちろん、失敗はたくさんあったよ。二人だけで車に乗ったり、互いに触れ合ったりとか。距離が近すぎた。

主にある姉妹として大切というよりも、自分を喜ばせたいな、という気持ちが強く働いていたよね。

——この世の価値観で恋愛を楽しんでいた頃、教会の兄弟姉妹の關係というのはどういうものでしたか？

それも、この世の感覚そのものだよね。この世の価値観に、「清さは大事だよね」というクリスチャンフレーバーがちょこっとかかっている感じ。模範もないしね。教会の兄弟同士の間で「誰がかわいいと思ってんだよ」

「好きなんじゃないの？」とか、そういうやり取りがあったりもした。

何を求めていけばいいのか

——恋愛(自己中心の愛)を捨てた後、僕らは何を求め、どのように歩んでいけばよいのでしょうか。

僕は結婚の素晴らしさを体験してから、「あの恋愛をしていた時に、何をやるのが本当に大事なんだ」と思うようになったんだ。結婚に対して神様が持っている計画、また祝福、すばらしさというものを見つけて、結婚すごいぜ、と思ってるところから僕の発言は出てくるということをあらかじめ言っておきたい。

結婚して、たった一人の人を愛して、その人と一つになっていくということって、自分は他の人を愛さないということの裏返しにもなる。そのことって独身の時から始まるんだよね。独身時代から、将来の結婚する人を愛し始めている。だから、無闇に「大好きだよ」とか「愛してるよ」とか、自分の心を与えない、大切にしておく。そして、本当に与えるべき人に惜しみなく与えなさい、ということをお皆に言いたいんだよね。

だから、結婚していない今求めていくべきものというのは、神様が望む男女関係、正しい結婚観、というところだよね。神様の望む真実の関係を求める。世の価値観、自己中心を捨てて、神様中心で生きていく。

——では、独身の間、神様が望む兄弟姉妹と真実な関係の築き方の原則となるようなものはなんなのでしょうか。聖書は、兄弟姉妹の正しい関係について、どう言っているのでしょうか？

御言葉で言えば、やっぱり互いを優れたものとして愛しなさい、というところになると思うんだよね。

ローマ12：10

兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。

男性が女性を、また女性が男性を心から優れた者として見る、その視点は本当に大事。恋愛で、相手を自分の喜びのために用いようとする。それはつまり相手を自分より低く見ている、見下しているところからもくると思うんだよね。その人にとって良いものは何かというより、自分にとって良いものは何かという視点だからね。だから逆に、互いに建て上げ合う、相手に益となることをしていく。男性であれば、姉妹たちに益となることをしていく。女性であれば、兄弟に益となることをしていく。その視点を持つということだよ。

真実の関係を求めていくメインステージ

これらの真実の関係を求め、神様中心で生きていくという歩みですごく大事だと思っていることの一つは、孤立しないということ。一人では戦えないよ、ということ。自分を孤独でない場所に置き続ける。教会、親との関係、仲間、そのような自分に対して真理を語ってくれる場所に、自分をいつも置いていく。それがすごく大事だね。僕自身も、教会で神様の言葉が語られ、自分の罪が示されて、軌道修正されながら歩んでこれた、それはやっぱり、自分を共同体の中にとどめたからだと思うんだよね。もちろん失敗はいっぱいあったけど。

それともう一つ、他のクリスチャンとの関係を深める。これも大事だね。自分の弱さを出せる仲間を作っていく。親だったり、牧師だったり、そういう人たちとの関係を努力して作っていく。

そういう関係って、向こうから来ない。自分から関係を築こうとしない、関係は成長しない。誰か声をかけてくれたらやろうか、という状況にいても、関係の成長は始まらない。

——それはクリスチャン生活すべてにおいて大切なことですね。

そうだね。でも、特に恋愛の話題って、隠されやすいと思うんだよね。恥ずかしいと思ったりだとか、どちらかというといつ秘められやすい話題だと思う

ている。秘められたものというのは、サタンの格好の餌食になるんだよね。秘めずに、光の中に出していく。そのような場所に自分をいやだけど置き続けるというのは本当に大事だと思う。だから、若者達が成長していく、その成長のメインステージは、やっぱり教会（注：共同体、神の家族）だと思うんだよね。実際、教会ってイエス・キリストの満ちるところって、エフェソに書いてあるでしょ。

エフェソ1：23

教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。

すべてのすべてが満ちる、何もかもがそこに集約されている。世の中で働いて、学校に行って、日曜日にちょこっと教会に行って、という「この世」がメインステージの生活じゃない。イエス様はそうじゃなくて、教会がメインステージなんだよ、と言っていると思うんだよね。僕たちがそこを優先して、そこをメインステージとしていくとき、その他が祝福されていく。孤独にならないという点でもね。クリスチャンの仲間達との関係をいつも求めて、その関係の中に自分を置いて生きていく。

——今まで恋愛を楽しんでいた場合、そういうふうに自分の見方を変えていくのは、すごく難しいところだとは思いますが。

そうだね。まあ、自分の弱さを認める、というところから始まるのかな。男性として、また女性として、「自分は弱いです」ということを光の中に出しておくということ。

「好き」という感情

——「好き」という感情は罪なのでしょうか。

ノーだよ。罪ではないよね。素晴らしいものだと思う。異性に関心を持つな、ということではないからね。

何でもそうだけど、良いものであっても使い方を間違えちゃいけない。「好き」という感情が出てきました、そこからどうするかがポイントだよ。そこが分かれば道なんだろうね。そこで、その感情を列車の先頭部分においてそのまま走らせると、恋愛になるわけだよ。その感情を一両目にするならば、汽車は恋愛に突っ走って、谷底に落ちていく（笑）。だからそれを、二両目、三両目にする。その感情がありますと認める。だけど、その感情に引っ張られない。じゃあ何に引っ張られるかということ、それはやっぱり聖霊だよ。

——自分の内にある「好き」という感情を認めて、なおかつそれを先頭に置かないと。

そう。そこで「あーこれは罪だ」とブレーキを踏むのは、僕は間違いだと思う。感情を一両目にしながらブレーキを踏むだけ、というやり方。結局感情を一両目に置いているんだよね。「これは罪だ、近づかないようにしましょう、触れないようにしましょう」っていうのは、ただブレーキを踏んでいただけなんだよね。そうすると蒸気がどんどんパワーアップして行って、ちょっとブレーキを緩めるとバーンと行ってしまふ。そういうケースが多いような気がする。見ないように意識すればするほど、そっちに引き寄せられていくというか。だから、感情があることをちゃんと神様の前に認めるというのはすごく大切なこと。それを今の自分として認めて、ありのままの自分の一部として二両目、三両目に置きたいよね。

——神様の前にその感情を出すときには、どのように祈れば良いでしょうか。

ブレーキじゃないんだよね。だからまず、「この感情があります。これが私です。うまく自分でコントロールすることができません。」と認めるところから始めるといいだろうね。感情があるけど、「神様、どうしたら良いでしょうか。どういう風に接したらいいでしょうか。私には分かりません。あなたが先頭になってください」と聖霊に明け渡す。

——「好き」という感情を一両目に置かず、二両目、三両目に置くという作業

も、やっぱり一人ではできないですよ。

そう、助けが必要なんだよね。孤立しているときって、感情や気分や思いが先頭になりやすい。ストップしてくれる助け手がいる。共同体でメッセージが語られて、友達が神様を一番にしようとしている姿を見て励まされたり、またその姿に憧れたりする。そのような場所にいるのは、すごく守りになる。でも、例えばずっと家にいて、たった一人で好きな人とメールやネットでやり取りをしていたりするならば、そこで聖霊を一両目にするのはやっぱりできないと思う。

だから、「実はこうなんだけど」と思いを言える仲間がいて、そして「その感情を管理しようね。一緒に祈ろうね」と真理を言ってくれる、そういう助けを受けつつ、自分も神様に何度も祈って、頼って、また聖霊様にこの気持ちらが本物かどうか確認していく。いずれにしろ、どんな場合でも一両目に聖霊様がいるということを確認しつついけたらいいな。

やっぱり、どれだけ神様の前と信頼できる人の前に出せるかということだよ。週報に載せる必要はないけれど（笑）。「何々兄弟が何々姉妹を好きになりました。お祈りください」なんてね（笑）。

——（笑）。では、実際好きな人が目の前に現れたときはどう対応していけば良いでしょう。感情が第一車両にいる場合と、聖霊が第一車両にいる場合の、それぞれの接し方はどうでしょうか。

うーん。感情に油を注がないようにしようね、という感じかな。例えばすごく接触が多かったり。そういうのは賢いやり方ではない。

感情が一両目のときは、極力物理的な距離を置いた方がいいだろうね。自分がもうポップーっていうときには（笑）、要はコントロールが利いていないわけだから、神様と、また信頼できる人にオープンにしつつ、遠ざかるのが一番良い方法じゃないかなと思う。感情を守るという面で助けにもなるしね。

聖霊が一両目のときは、平安だと思うんだよね。僕にはこういう感情があるけれども、聖霊が導いてくださる、という信頼感があるときは、自分

の中に平安がある。例えばその人が自分に対してにこっと笑ってくれたりしたときにさ、感情が一両目だったら暴走しちやいそうなときでも、聖霊が一両目のときは、冷静でいられる。「自分はそれで暴走しない」っていうふうに、自然としていられるんじゃないかな。そうじゃなくて感情が一両目のときは、ちょっと距離開けすぎなくらい距離を置いても良いと思う。

まあ、聖霊が一両目だとしても、兄弟姉妹としての距離はある程度保たないとね。教会中心の関係の中で、光の中でやっていこうとしているときには、例えば教会の中でその人としゃべるときがあったとしても、自分の感情を知ってくれている人が二人、三人と周りにいて、その状況が分かるわけでしょ。それってすごい守りだと思うんだよね。状況を知ってくれている人が同じ空間にいるときは、やっぱり安心感があると思うんだよね。そういう人たちに、正しい距離を保っているかどうかコメントを求めている。「こここのところ、どうだったかなあ」とか、いろいろ話していく。そうしたら、「じゃあ、次はそれやってみようか」とか、「次はもうちょっとああしてみようか」とか助言を受けて、一步一步、その人を大切にするという視点で自分の行動を見直していくことができる。

関わりの中に生きるっていうのが大事なんだよね。神様は関わりの中で生きる方だからね。関わりの中にこそ命がある。僕たちもその中に留まって、心を開いて、意見を聞くという努力をしていくのが大切なんだ。

でも、そこにとどまらないという選択もできると思うんだよ。共同体の中にも、心を開いていない場合、それは孤独なんだよね。体だけいて関係がない。それは危険な状態だよ。

——心を開く人がいる、ということが重要なわけですね。

大きいよ、それは。また、できるなら自分に対して権威を持っている人にそういう話ができる、すごく助けになる。霊的な守りの中に入ることができる。ユースパスター、牧師、スモールグループのリーダー、また家だったら親に対して。そのように、自分の権威に対してその話をしていくというのは、すごく守りになる。神様は権威の中で祝福を流すし、そこに

は守りがあるんだよね。今の問題って、権威への反抗だから、その祝福の流れが壊れちゃう。親、学校、教会、権威に対して不従順。そこは隙になっているよね。逆に言うと、そこを大切にすると、本当に助けになる。

人は恋愛に何を求めているのか

少し話が脇に逸れるけれど、恋愛のことを考えたり、あるいはそれを誰かに話してる時とかって、ある意味一瞬満ち足りている。例えていうなら、美味しいものを食べた後のあの満腹感。もちろん、その後ですぐお腹が空くわけだけれど。その満足感を得ようとして恋愛に走る場合があるわけ。恋愛をしたくてしているというよりは、何か満ち足りないものを紛らわすために、ある人は恋愛に走るわけ。好きになったりだとか、その時の興奮だったりとか、そこで得ている喜びで一瞬でも満足しようとする。要するに、根本的なところで不満足感がある。これが解決されないと、いつまで経っても同じことをする。もし恋愛をやめたとしても、違うもので満たそうとする。人によっては仕事やお酒、そういうもので自分の渴いているものを満たそうとする。

—そのような不満足感というのは、何に対しての不満足感なのですか？

やっぱり、神様との個人的な関係におけるものだよ。神様の教えとかから平安や満たしを得られていないときや、神様がすごく遠く感じるときって、僕たちは霊的に渴いてくる。でもいやでしょ。渴くのって。その渴きをなんとかしたいから、一瞬でも喜びたい。そうすると、恋愛や仕事に走る。あるいは心に傷を受けていると、間違っただけに求めちゃう。

こういうのは、多かれ少なかれ誰にでもある問題だと思うけれど、その深さ、人生に対しての影響力というのは人それぞれ違う。そういう場合には、集中的に十字架の赦しという癒しの働きを明確にやっていかなければいけないこともある。

まとめるならば、恋愛を捨てると宣言したのにどうしても繰り返す人がいる、ということかな。そういうときはもっと深いところの問題ま

で取り扱わないと、変わっていかないということだね。

同じ教会に属さない友人関係

——同じミニストリーや教会に属さない異性の友達というのがいます。そういう人との関係は教会などの守りがない場所にあり、危険だと思うのですが、そのような関係において何か大切なことはあるでしょうか。また、メールや、インターネットでの関係についてはどうでしょうか。

超密室なんだよね。携帯、メール。親がチェックしないし、できないわけでしょ。誰とどういうメールをしているかとか。だからみんな、携帯のメール内容を人に見せられるかと言われると、結構微妙なところはある。メール上の性格、キャラクターが違う人もいるしね。

僕は若者達に、メールの内容を信頼できる人に、例えばお母さんに全部見せられる？ というところをチャレンジしたいね。もし見せられないならば、そこには何か良くない思いがあるよ。

僕と妻は夫婦で同じメールアドレスを使うの。妻も同じアドレスを使うようにしてるわけ。そうすれば、守られるからね。これはあくまで夫婦だからできることだけれど。

——キャンプなどだと、相手を建て上げるという視点ではなく、ただその関係を自己中心に楽しんでしまうだけということがあると思います。

ある意味、教会でしっかり兄弟姉妹の関係ができていれば、そんなに問題にならないんじゃないかと思うんだよね。それぞれがキャンプでの若者の交わりに依存しなくていいというか。メインステージから外れた、一時的な場所なわけでしょ。でも、教会がメインステージになりえない場合、若者の交わりに渴いているから、そういう所がが一つと求めるんじゃないかな。キャンプって、独特の興奮があるじゃない。そういう燃やされる時ってあるんだよ。日々の淡々とした生活だけじゃなくて、ここぞというときにたくさん人が集まって、パッションがある。それ自体が悪いんじゃない。でも、それを求め始めると、だんだんおかしくなってくるんだよね。

だから、メインステージをしっかりとやってるかい？ 教会での関係を大事にしてるかい？ 関係の中に生きようとしてるかい？ 孤立してないかい？ そのところに、みんなはチャレンジしてほしい。

——このような歩みを歩んでいこうとしている若者達に、励ましをお願いします。

最初にも言ったけど、本当に結婚は素晴らしいよ。二人の人が一つになるっていうプロセスとその喜びというのは、いや～ほんとにすごいよ。

それに、神様の導きは本当に信頼できる。だから、神様の約束を信じ切って損はなし、と思う。僕も洗礼を受けて十五、六年になるけど、この方についてきて本当に良かったな、神様に従ってきて良かったな、と思うね。だからみんながそういう決断をするってことはすごいことだよ。その歩みをぜひ続けてね。

インタビューを終えて：

2時間にわたるインタビューの中で常に語られていた、神の家族として生きることの重要性。しかし、教会で孤独感を感じる人や、親がクリスチャンでない人も実際には多い。そのような厳しい環境に置かれた人はたち、そこで恋愛を捨てることの難しさに直面するだろう。そのような人たちに対して、墨さんは次のように語っていた。「彼らが置かれている状況を、僕は分かってあげたい。教会での関係に恵まれている人と違って、彼らにとって恋愛を捨てる歩みをするのはすごく大変だ。みんな、困難な中で本当によくやっている。でも、だからといってそこで立ち止まらないで。僕たちが目指しているところはすごいところなんだから、それにふさわしい歩みをしようよ」

イエス様の真理には常に恵みが伴う。すべての人が同じ環境にいるわけではない。けれどすべての人が、イエス様が差し伸べてくださる御手によって、この歩みをしていくことができる。その豊かな恵みを知ることができた2時間だった。

第3章：「神の道を選ぶ」 清野使門

「恋愛なんてゴミ箱にポイよッ!」。ここまで読んでどうだろう。ストーンと胸に落ちただろうか?

この章では、僕の体験を織り交ぜながらこの問題について話したい。

十代の頃

僕も、今まで本当にたくさんの女の子を好きになってきたんだ。恋をするってやつだ。少しの間好きだった子もいれば、すごく長い間好きだった子もいた。中学生の時から20歳になるくらいまでの僕の心の中は、半分が音楽だった。音楽を聴くことと、バンドをすることだ。そして、もう半分は女の子だった。神様はといえば、100%のうち1~2%あるかないかだった。……あったのかな? 音楽と女の子、この2つがいつも心の中にある、そういう生き方をしていたんだね。

100%のうち、この2つのものが49%と49%くらい僕の心を占めていた。そして、もしそのうちのどちらかを捨てろと言われてたとしたら、僕はもう即座に音楽を捨てただろうね(笑)。音楽なんかゴミ箱にポイよッ!(笑)

高校生になった頃には、一種の悟りのようなものをひらいていた。「一人の男として最高の人生とは、生涯を通して一人の女性を愛することだ」。

ちなみに、僕は高校生の頃、僕の親友と自分の結婚について随分と語ったけれど、やっぱり「高校生の頃から、そんなこと考えるなよ!」と笑われたね(笑)。

僕がひらいたこの「悟り」、悪くない考えだとは思わないかな? お金をもうけたい、とか、有名になってキャーキャー言われたいとか、そのような自分勝手なものではなく、一人の女性を愛したいというとても誠実で

良いものだと思うのだけれど！

しかし、「いけてるぜ、この考え方！」と思っていたその考え自体が、実は間違いだった。

どんな間違いだったんだろう。簡単だね。神様がいなかったんだ。

神様が僕の人生をどのように考えているのか、神様が僕の人生に何を望んでいるのか、神様が喜ぶのは、僕がどのように生きていくことなのか。それらのことを全部抜きにして、この悟りをひらいていた。これは間違っていたことだったんだ。

僕は毎週日曜日、礼拝に行っていた。休んだことは、一度か二度しかない。中学生になってからは、これもほとんど休まずに水曜日の聖書講解に行くようになった。それでも、僕の考え方は神様に支配されていなかったんだ。

僕は好きな女の子と付き合っ、結婚して、幸せな人生を生きたい、と考えていたけれども、そこに神様はいなかった。

人生の転機

そんなある時、僕は人生が大きく変わる体験をした。それは、はじめて自分の罪というものを理解するというものだった。罪とはどういうものか、ということがわかったんだ。それまでは罪がある、ということは知っていたけれども、自分がどうしようもない罪人で、本来なら地獄に行かなければならない罪人だ、ということまではわからなかったんだ。

僕の両親は僕が生まれる前から神様のことを信じていたから、僕が生まれた時から神様のことを教えてくれた。僕にとっては、神様がいるのは当たり前のことだった。神様を信じているのも当たり前のことだった。つまり、天国に行けるということさえも、僕にとっては当たり前のことだったんだ。僕の中には、「すべての人は地獄に行くのが当たり前」という考え方がなかった。

しかし、20歳の時、人生に行き詰まり、4つの福音書を通して読んで、

自分が罪人なんだ、ということがわかった。そして、はじめて僕は涙を流しながら「神様、僕の罪を赦してください」と祈った。そのとき、十字架の痛みと愛が、はじめて僕に迫ってきた。

僕が何回も、「神様、僕の罪を赦してください」と祈るたびに、神様は「もう、赦しているんだよ」と答えてくれた。僕がその祈りの言葉を言い終わらないうちに、神様は「もう赦しているよ！」と言ってくれたんだ。僕の罪よりも神様の愛が先にあって、圧倒的に僕に迫って、その罪を十字架で赦してくれた、ということがわかった。

このような20歳の時の体験から、僕は「これからの人生は、もう自分のために生きるんじゃない。これからは、神様が備えてくださった道を、神様の仕事をしながら生きていくんだ」というふうに思い始めた。僕の人生は大きく変わった。それまで、「音楽」と「女の子」の二つに占められていた僕の頭の中が、「神様」と「女の子」になったんだ(笑)。まあ、その時神様と女の子のどちらを選ぶかと言われたら、多分神様を選んだだろう。未練たっぷりだね(笑)。

僕の中で、神様の存在は確実に大きくなってはいたけれど、いまだに恋愛は僕の中で大きいものだったんだ。神様に従っていくのはいいものの、「じゃあ、僕はいったい誰と結婚するんだ!？」という思いは、非常に強く残っていた。

ただ神様だけを愛する

しかし、25歳の時に、僕は恋愛をやめることができた。それは、大きな失恋をきっかけとして、独身というものに向かい合った時からだった。その時から、僕は次のように祈るようになった。「神様、もし、あなたが僕に結婚する相手を与えてくださるならば、それを感謝して受け取ります。けれども、あなたがもし、僕が生涯独身であることを望んでいるのならば、それも心の底から感謝して受け取りたいです」

この祈りは、簡単にできるものではなかった。結婚には、確かにいろいろ

ろな苦しみや悩みが伴う。でも、結婚した二人の間にだけ神様が与える、男女の関係を通してのたくさんの祝福と喜びがある。「生涯独身を受け取ります」という祈りは、「生涯結婚の喜びを捨てます」という祈りとまったく同じものだった。特に僕は、高校生の頃からずっと結婚に憧れていた。その僕が結婚を捨てる決心をするということは、人生をかけているものを捨てるようなものだったんだ。

僕が結婚したかった理由は、単純だ。喜びたかったからだ。男女の関係を通して、喜びの人生を送りたかったんだ。けれど、25歳の時に、「もし神様が望むならば、その関係からくる喜びはなくてもいい！」と思い、祈るようになった。ここには、本当に大きな苦しみがあったよ。祈りながら、体が震えて、涙が出てくるほどに。最初に祈っていた頃は、それは100%悲しみの涙だった。

けれども、神様はそれをだんだんと変えてくれた。神様は僕にこう言うてくれた。「わたしがいるじゃないか。君が結婚してもしなくても、君の一番近いところに、わたしは常に寄り添っているんだよ」。

結婚をする、しないで、幸せ、不幸せが決まるのではなく、神様と愛し合えるかどうかで、幸せ、不幸せが決まるんだ。だから、「神様、あなたが望むなら、僕は独身で生きます。あなたの願うとおりに生きていきたいです」と僕が祈り続ける中で、僕の悲しみの涙は、喜びの涙に変わっていった。なぜ喜びかというと、「ああ、僕は今まで縛られていたものから解放されて、神様と愛し合うことができるんだ」ということがわかったからなんだ。今までの自分がむしろ不自由で、これからの自分の方が自由なんだ、と神様が教えてくれて、その独身の祈りは、僕にとって喜びに満ちたものになっていった。神様と愛し合って生きていけるんだ、ということが分かったんだ。

心を何に支配されるか

ここでみんな間違えないでほしいのは、僕たちの人生は「独身か、結婚か」じゃないんだ。これは、あくまでも僕と神様の問題であって、神様との間に何も入れずに生きるのか、何か入れて生きるのか、という問題なんだ。

結婚している男女はたくさんいるけれども、結婚しながらも単なる恋愛状態の男女はたくさんいる。結婚したとしても、その男性と女性が神様を見上げていないならば、その結婚は恋愛ゲームに過ぎない。いつでも別れることができるんだ。僕たちが求めなければいけないのは、あくまでも神様との関係なんだ。神様と愛し合うことに比べれば、独身でいるとか、結婚するとか、そういうことは大した問題じゃないんだね。

独身の祈りを通して「結婚」また「女の子」というものを捨てたことで、神様が僕の心を占領することができるようになった。それまでは、神様と女の子が僕の心を分け合うように支配していたんだけど、その時から、神様だけが僕の心を大きく支配することができるようになった。

他にも、もちろん細かいいろいろなものがある。それらの思いが僕の心には存在している。けれども、僕の心を支配することができるのは、神様だけになったんだ。

僕の心が神様だけに占領される前は、恋愛というものが僕にとってもう一つの神様になっていた。これは偽物の神だけれど、僕たちの心を占領する力を持っているんだ。偽物の神が僕たちの心を占領している限り、本当の神様が僕たちの心を全部占領することは決してできないんだね。聖書のストーリーから、そのことを学んでみよう。

偽物の神

出エジプト記の中で、神様がモーセに語った言葉が記されている。モーセがエジプトの国から奴隷だったイスラエル民族を引き連れて、荒野を通り、シナイ山のふもとまで来たとき、神様はモーセに「一人で山に上りな

さい」と言われた。モーセが上ると、その山上で、神様はモーセに戒めを与えられた。「これをしなさい。これはしてはならない」と。

その間、山のふもとで待っていたイスラエル人は、モーセがあまりにも長く山の上に留まっているので、モーセの兄アロンに頼み、人々から金を集めて金の子牛を作った。そして、その子牛を神様として、どんちゃん騒ぎをした。

モーセは何も知らずに山の上にはいたが、神様はモーセに「今すぐ山を下りなさい。あなたの民は、してはならないことをしている」と言われた。モーセが下りてみると、神様が言うとおりの、イスラエル人は子牛の周りで騒いでいたわけだ。モーセは激しく怒り、神様からもらった戒めを記した石板と、金の子牛を砕いてしまった。そして、再びモーセはシナイ山に上っていった。

その時に、神様がモーセに語られたことの一つが、次の言葉だ。

出エジプト34：12～14

よく注意して、あなたがこれから入って行く土地の住民と契約を結ばないようにしなさい。それがあなたの間で畏とにならないためである。あなたたちは、彼らの祭壇を引き倒し、石柱を打ち砕き、アシェラ像を切り倒しなさい。あなたはほかの神を拜んではならない。主はその名を熱情といい、熱情の神である。

モーセとイスラエル人は、今まさに約束の地に入っていく途中だ。その約束の地には異国の人々がいた。彼らは神様を信じていない民だ。その土地は、神様を信じていない土地だ。

神様はイスラエル人に、異邦人と契約を結んではならない、と言われた。「彼らが信じている間違った神の祭壇を壊し、偶像を切り倒しなさい。彼らの神を拜んではならないよ」そう言われたんだ。

さて、今生きている僕たちは「この世」という世界にいるよね。そして、

僕たちは天国に戻っていくわけだ。フィリピ3章2節に「わたしたちの本国は天にあります」とあるように、僕たちは天国の住民だ。しかし今、僕たちはサタンが支配している「この世」にいる。そして、僕たち神様の民は、この世と契約を結んではいけないんだ。

神様はイスラエル人に、他の神を拜んではならないと命じられた。「他の神」とはなんだろう。僕にとっては、それこそがまさに恋愛だった。

僕は神様を信じているのと同時に、この恋愛を神として拜んでいたんだね。そして「他の神」としての恋愛は僕にとって引き倒され、打ち砕かれなければならないものだったんだ。

恋愛というのは、この世が生み出した最強の神といってもいいほど強い力を持つものだ。よく、「お金が神」なんて言うけれど、人によっては恋愛はそれよりも強いかもしれないね。

神様の民はこの世の神々を拜んではいけない。みんなの中には、恋愛が神、という人もいるかもしれないし、またはそうでない人もいるだろう。もし、恋愛が神になっている人は、その恋愛を引き倒して、打ち砕いて、切り倒さなくちゃいけない。恋愛でなくても、何か神様以外のものが、まるで神であるかのようにみんなの心を支配しているならば、みんなはそれを打ち倒さなければならないんだ。

この箇所前後で、神様はこのようにも言っている。「土地の民と、婚姻関係を結んではいけない」。土地の人たちと結婚しちゃいけないよってね。なぜなら、その人たちの神の方に心が向いてしまうから。引きずり込まれちゃうんだね。もしみんなが、この恋愛というものに支配され続けるのであれば、みんなの心は、神様から恋愛の方へとずれていくんだ。

この恋愛を捨てるというテーマは、みんなにとっては厳しいことかもしれないけれど、みんなが本当に神様と愛し合いたいと願うのであれば、偽物の神は切り捨てなければならない。

熱情の神様

神様は御自分のことを、「主はその名を熱情といい、熱情の神である。」(出エジプト34:14)と表現している。情熱を持って、僕たちに迫ってくれる。そんな神様に対して僕たちがすべきことは、情熱を持って神様を愛する、ということなんだ。

情熱を持って神様を愛さなくても、罪をゆるされて、神様を信じていれば天国へ行くことはできるよ。だけれど、情熱を持って神様を愛さないみんなの人生には、本当の喜びはないんだ。僕はもう、そういう生き方はしたくない。

情熱を持って僕たちに迫ってくれた神様に対して、心から情熱を持って、神様を愛し、神様に仕えて、神様の道を歩んでいく生き方を、みんなはすることができる。神様は、僕たちがそれをできるように力を与えてくれるから。

みんなが本当に神様の祝福を受けるための一番の近道は、偽の神を捨てる、という道にあると思う。みんながそのような生き方をすることができたら、と願っているよ。

付記：

「兄弟姉妹の関係 ～下諏訪キリスト教会と僕の歩み～」

編集・証し：清野耕地

僕たちの教会では、ここ数年恋愛について、また男女がどのように助け合うかについて考え続け、実践を繰り返してきた。というのは、この世の恋愛事情はあまりに聖書の価値観から離れ過ぎていたからだ。世の恋愛観は教会の中まで持ち込まれ、クリスチャンたちも罪を重ねていく現実を目の当たりにしてきた、ユースリーダーたちは、「このままではいけない」と思い始めた。神様は独身の男女に何を願っておられるのだろうか？ 恋愛とは何なのか。結婚とは何なのか。そもそも、男とは何なのか。女とは何なのか。

僕たちの教会は、2005年、「恋愛なんてゴミ箱にポイよ！」というテーマで行われたユースキャンプ“ミニホレブ”をスタート地点として、それらのことを考え、試行錯誤を繰り返してきた。その中で学んだことを語りたいと思う。

僕たちが掲げたスローガンは、「恋愛をやめよう！」というものだった。僕たちは、まず恋愛をこのように定義した。「相手への献身を考えない、自己中心の愛」と。

ミニホレブ以降、教会は徐々にユニークな歩みを始めた。若者達の集会で食事をするとき、男子は男子だけでまとまって座り、女子は女子だけでまとまって座る。絶対に男女で車の相乗りはしない。車に乗るときも、男女が隣同士にならないように配慮する。礼拝の挨拶の時間でも、男女は声はかけても握手はしないようにする、などなど。

別に、「僕たちの教会はこれからこうしましょう！」という規則を作ったわけではない。僕たちが自分で考えてそのような行動をとっていただけだ。恐らくはたから見たら、「この教会の男女って、仲悪いんじゃないの？」

と思うような状態だったと思う。でも、教会の若者達はその状態を誇りに思っていただろう！ なぜなら、神様の願っておられる清さを感じ、その清さを喜んでいたので。確かに行き過ぎの部分も多くあったことだろう。でも、この状態を通ることによって、僕たちは一つの素晴らしいことを発見した。つまり、異性を自分の欲望の対象としてではなく、愛する兄弟姉妹として見ることにより、男女間の妙な「駆け引き」が消滅し、自然な目線を持てるようになったのだ。男女の間のずぶとい境界線は、安心を生んだのだ。

しかし、僕たちは新たな問題に直面することになった。男女にはっきりとした境界線を引いたのはいいものの、様々な状況にどう対応していけばよいのか、僕たちはまだよく理解していなかったのだ。恋愛に対する強い拒否反応を持ったために、僕たちはしばらくの間、男女間の距離を取ろうとしない若者達に対して非常に冷やかな視線を持っていたことは間違いない。もちろん、それは神様の清さを求めるがゆえであったとは思う。でも、そのために隣人を愛するというイエスさまの大事な教えに目をつぶりがちであったことも否めない。

僕たちは、また次の段階に入らなければならなかった。

最近、僕たちの教会では男女でもよく話をするようになった。共に主を求める兄弟姉妹として相手を意識しつつ、お互いの賜物を組み合わせて神様の仕事をしていく中で、僕たちはよくコミュニケーションを取るようになってきている。清さを保ちながら、神様のために力を合わせていく関係作りの素地が、教会にだんだんと出来つつあるといえるだろう。

さて、僕個人としての体験を話そう。僕は中学生の終わり頃、ミニホレブで「恋愛なんかゴミ箱にポイよっ！」の学びを受けた者の一人だった(ミ

ニホレブでは実際に『恋愛』と書いたメモを皆で破り、ゴミ箱にポイした)。それ以来、僕の異性との関係の築き方には大きな変化が起こった。自己中心の愛をやめて、異性との関係においても神様に従わなければならない、ということ、当時の僕なりに真剣に感じて取り組み始めた。

ここで注意したいのは、僕の取り組み方だ。僕は女の子を避け始めた。僕は自分を清く保ちたいと思っていた。女の子はあまりにも僕の気を引く存在で、僕は、恋愛を捨てて神様に喜ばれる関係を築くためには、女の子を避けなければいけないんだと思っていた。

しまいには、まるで僕が女の子に近づいていいのは半径5メートルまで、と決められているかのようにふるまっていた。接触厳禁、隣の椅子に座ってはいけない、女の子を見てはいけない、できるだけ知らんぷりする、という感じだ。僕はそうすることで女の子を真に愛していると思っていた。だから、教会全体が男女の間に距離を設けようとしている時期、僕は教会の中でも一番過激だっただろう。

はたして、これで僕は恋愛を捨て、姉妹達と正しい関係を持っていたのだろうか？ 残念ながら答えは“ノー”なのである。なぜなら、正しい距離感を求めている時点では良かったが、そこから先にある新しい関係を築こうとしていなかったからだ。

僕は自分の中に、間違った2つの公式が存在していることに気付いた。そして、それらを捨てることにした。それらとは、以下のようなものである。

異性に近づく＝異性を愛する

異性から離れる＝恋愛を捨てる

僕は教会と共に歩いていく中で、「異性に近づく＝異性を愛する」の公式が間違いであることを既に学んでいた。つまり、女性から離れることで、彼らを愛することを学んだ。それは女性が神様を見上げようとするのを邪

魔しないことにつながる。例えば、不必要に相手の体に触れないことで、姉妹達の気持ちを乱すことなく、彼らが神様を見上げようとするのを妨げないことができる。

一方、僕は、「異性から離れる＝恋愛を捨てる」の公式を、まさに信奉していた。でも、その公式によって僕が恋愛を捨て、異性を正しく愛していたかといえば、そうでもなかった。

僕は女の子から離れることで、女の子の関心を引こうとしたんだ。「清さを求める男」というのが、まるで「〇〇社社長」という肩書きのような輝きを放っているかのように、僕はそれを売りにし始めた。「俺に関心を持ってくれよ！」と言わんばかりに女の子にアプローチするのは正反対だが、僕は「清さを求めている僕の方が格好良いだろ？ 僕を見てくれよ！」という気持ちで、女の子から離れた。このような自分勝手な思いは、特にキャンプに参加しているときに、僕の心の中に強くわき上がってきた。

こんな状態で、恋愛を捨てていたといえるだろうか？

いいや。女の子から離れていても、結局僕は恋愛をしていたのだ。

異性から物理的な距離を取っていても、清いとはいえない。正しい動機と正しい心がなければ、むしろ、ますます自己中心の愛で相手に接するようになる。これは、間違った方法だ。

また、ここは特別に男子に向けて書くのだが、僕ら男子が女の子から離れようとするとき、少なからず「彼らは自分にとって誘惑になる。僕に罪の思いを起こさせる」という考え方をすることがある。君の言いたいことは分かる。確かに女の子達は、僕らにとってあまりにも美しい。でも、その考えはやめるべきだ！ 僕らが罪を犯す理由を、女の子が持つ性質に押しつけてはいけない。「女の子が美しい」から僕らは罪を犯すのではなく、僕らの中の罪の性質のゆえに、僕らは罪を犯すのだ。

「あなたは僕にとって罪を誘発する危険性を伴った存在なので、一時あなたから自分を分離する必要性を感じました。しばらく僕とは口を利かない

で下さい」などと言っているようなものだ。女の子は「危険物注意」のステッカーが貼られたトラックなのか。違う。彼らは僕らが愛すべき存在だ。その美しさと魅力は罪ではなく、神からの賜物なんだ。彼らに心を惹かれるな、とは言わない。でも、心を惹かれている時でも、僕らは正しく彼らを愛していく必要がある。

僕たちの目的は、男子と女子の間の堅苦しさを取っ払い、気楽に話し合う柔らかな雰囲気を作ることではない。また、兄弟と姉妹の間に断絶を設けることでもない。僕たちの兄弟姉妹としてのあるべき姿は、共に神に従い、究極的には、お互いが神に従うのを助け合う関係を築くことだ。

神様に喜ばれる兄弟姉妹の関係は、会話の量や、親密さなどで測れるものではない。相手を優れた者と思い、尊敬し、清さの中に常にいること。そして何よりも、神様を愛そうといつも心がけることである。

フィリピ2：3、4

何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。

あなたが、兄弟姉妹の平和な関係に生き、神の喜ばれる関係を築くことができるように。

紹介：

清野基（せいの もとい）

1980年生まれ。教会スタッフを経て、2008年4月より下諏訪キリスト教会牧師。長野県下諏訪町在住。男児2人のパパ。大のサッカー好き。下諏訪キリスト教会最強のゴールキーパー。

桐山壘（きりやま るい）

1977年生まれ。教会スタッフを経て、2008年4月より垂穂（たりほ）キリスト教会牧師。東京都大田区在住。女兒1人、男児2人のパパ。顔は欧米風だが、自称ちゃきちゃきの江戸っ子。

清野使門（せいの しもん）

1978年生まれ。教会スタッフを経て、2008年9月より中国宣教団体のスタッフ。東京都大田区在住。女兒1人のパパ。12月に2児のパパになる予定。航空会社の経営を夢見る今日この頃。

なお、この冊子に記載されている証しは、26才の時のものです。その後、使門さんは桐山夫妻、清野基夫妻の紹介により、結婚へと導かれました。

編集者：

清野耕地（せいの こうち）

1989年生まれ。小学6年生の秋からホームスクーリングを開始。下諏訪キリスト教会。長野県下諏訪町在住。

推薦図書：

- 「聖書が教える恋愛講座」 ジョシュア・ハリス著
ホームスクーリング・ビジョン社
- 「誘惑に負けないために」 ジョシュア・ハリス著
ホームスクーリング・ビジョン社
- 「情熱と純潔」 エリザベス・エリオット著
いのちのことば社

この小冊子を御入用の方は、何部でも無料で差し上げます。下諏訪キリスト教会宛てに、FAXもしくはメールで御連絡ください。

「恋愛なんてゴミ箱にポイよッ！」

発行日 2009年11月15日

発行人 「恋愛なんてゴミ箱にポイよッ！」編集委員会

発行所 下諏訪キリスト教会

住所：〒393-0074 長野県諏訪郡下諏訪町緑町 328

TEL/FAX：0266-27-3862

<http://shimosuwachurch.net/>

Eメール：shimosuwa_church@ybb.ne.jp
